

開催報告 2022
- 2022 REPORT -

Photo by YUHEI MIYATA



【主催】文芸による名古屋の魅力推進事業実行委員会
(構成団体|名古屋市、愛知淑徳大学、文化のみち二葉館、公益財団法人名古屋市文化振興事業団)
事務局|公益財団法人名古屋市文化振興事業団

公式note

<https://note.com/kotonohanagoya/>



公式ウェブサイト

<https://kotonohanagoya.webnode.jp/>





開催報告 2022
— 2022 REPORT —

KOTONOHA
NAGOYA ©

目次

- 2 募集要項、課題写真、賞
- 3 入賞・入選一覧
- 4 選考委員コメント、写真提供
- 5 金賞作品
- 6 銀賞作品
- 8 佳作作品
- 10 入選作品
- 25 ワークショップ、最終選考会、コトノハなごやサロン
- 26 メディア掲載・広報普及活動
- 27 制作物
- 28 開催概要、スケジュール
- 29 募集結果データ

募集要項

「日常のなごや」を切り取った課題写真A～Cの3枚のうちから1枚を選び、その写真から連想する“名古屋を感じられる”短編文芸作品を創作すること。

- 応募資格 名古屋市在住、在勤、在学の方、または名古屋を訪れたことのある方。
- 創作規定 (1)本文が200字以上800字以内で日本語・自作未発表の作品。
(2)1人2作品まで応募可。ただし同じ写真で複数の応募は不可。
※応募時点で著作権などの全ての権利が応募者に帰属する作品。
※合作や共作は不可。
- 応募方法 公式ウェブサイトからの応募を推奨。郵送受付も可。
- 公式ウェブサイト <https://kotonohanagoya.webnode.jp/>

課題写真



A 名鉄百貨店ナナちゃん人形



B 久屋大通公園 希望の泉
中部電力 MIRAI TOWER






C 大須商店街

賞

- ・コトノハなごや金賞 (1作品)…賞状と賞金5万円
- ・コトノハなごや銀賞 (2作品)…賞状と賞金3万円
- ・コトノハなごや佳作 (2作品)…賞状と図書カード5,000円分

入賞・入選一覧

※入選は以下20作品 ※入賞はマークのあるもの

選択画像	作品タイトル(50音順)	氏名またはペンネーム
画像A  名鉄百貨店®	おつきいなあ	高本 霧
	顔を上げれば見えるもの	北崎 景
	嫌い、時々大好き。	終める
	この場所から見えるもの	メグリくる
	ナナちゃん	瞳
	ナナちゃん人形で、六時半。	おくもも
	ノッポ	小渡琉衣
画像B 	文乃さんの好きなこと	浅野トシユキ
	恋文	高瀬奈々
	藤川潮の最近	サノアイコ
	約束	加藤大樹
画像C 	いつまでも幸せに暮らしましたとさ	ジャッキー
	今も昔も	水薙月架
	いやし心の大須	森 三和子
	大須に、雨が降り出した	桑嶋ミキト
	最後に、あなたへ	いもてん
	蕎麦の匂い	門歩 鸞
	父と大須	森野 浩
	夏の終わり	東歩
	ばれんように	田中へいた

選考委員コメント

候補作はどれも質が高かったと思います。特に上位の作品については、どの作品を選ぶべきか結構真剣に悩みました。ただ、ひとつ気になることがありました。物語の語り手が読者にわからない形で始まり、最後にそれが何者かわかるという「種明かし」形式のものが非常に多かったことです。皆さん多分思いついた時に、これなら面白い、と思われたでしょうが、たった20作品の中でこれだけ重複するということは、実はありふれた手法だということです。それは忘れないでください。金賞の作品も最後に秘めていた謎が解けるという形式ですが、筋運びの妙によって驚かせてくれる、技法的にとっても優れた作品でした。

1959年、名古屋生まれ。名古屋工業大学卒業。1981年『黒織』が星新一ショートショートコンテスト優秀作に選ばれ、1990年『僕の殺人』で長編デビュー。2005年『黄金蝶ひとり』でつづのみやこども賞受賞。2017年『名古屋西 喫茶コトリロ』で日本と異文化中書店大賞第二位。著書は他に『新宿少年探偵団』『奇談蒐集家』『ミステリなふたり』『麻倉玲一は信頼できない語り手』他、多数。



太田忠司 Tadashi Ohta /作家

予備選考を経た20作品を読ませてもらったが、それぞれ個性的で読み応えがあつて、年ごとにレベルが上がっている。こういった公募だと、選ばれた作品の作者の年齢層は割と高くなる傾向があるが、サロンに於いて作者の方とお会いしてみたら、老若男女いらっやして、特に若い方が多いのにも驚いた。

おそらく作品や作者の多様性も、若者の創作への意欲も、写真から引き出されたものだろう。気軽な気持ちで初めて書いてみたのだろうな、と感じさせる作品もあるし、これを書かずにはいられなかった、という“人生”を感じさせるような作品もある。写真を元に文章を発想する、というコンセプトがなければ、これらの作品はこの世に現れなかった、と思うと、この企画自体すごく価値があるものだと思う。読んでよかった、と思われされる選考の機会だった。ありがとうございました。

岐阜県大垣市生。2002年『リレキショ』にて第39回文藝賞を受賞しデビュー。続く『夏休み』、『ぐるぐるまわるすべり台』は芥川賞候補となる。ベストセラーとなった『100回泣くこと』ほか、『デビクロクんの恋と魔法』、『トリガール!』等、映像化作品多数。アプリゲームがユーザー数全世界2000万人を突破したメディアミックスプロジェクト『BanG Dream!』のストーリー原案・作詞等幅広く手掛けており、若者への影響力も大きい。



中村 航 Kou Nakamura /作家

昨年に続き、選考にかかわらせていただきました。中村航さんが「回を重ねるごとに、レベルが上がっている」と指摘されたとおり、私も今回の入選作は、前回と比べて粒ぞろいな印象を受けました。選考会での得点も、委員によってかなりばらつきました。僅差だったことの裏返しだと思います。

コトノハサロンでのやりとりを通じて、応募者には、学校で創作を学ぶなど高い意識で取り組んでいる方が、たくさんいらっやることが分かりました。今回をきっかけに、他の文学賞や新人賞に挑戦される方も、でてくるかと思えます。いつか、私が文芸記者として「受賞作家」となったどなたかの取材をさせていただくような展開があればうれしいです。

中日新聞文化芸術部デスク。1974年、名古屋生まれ。1998年、中日新聞入社。北陸本社整理部、長野支局などをへて、2008年から東京本社文化部、17年から名古屋本社文化部（現・文化芸術部）。18年から現職。主な取材ジャンルは、文芸や出版、美術など。担当連載は哲学者・齋藤清一さんらのエッセイ「時のおももり」、植田さんの漫画「喫茶アネモネ」など。



中村陽子 Yoko Nakamura /新聞記者・文化担当デスク

課題写真提供・監修

宮田雄平 Yuhei Miyata /フォトグラファー

名古屋市在住。名古屋ビジュアルアーツ専門学校 写真学科を卒業後にフリーランスのカメラマンとなる。雑誌や書籍、広告、ライブやイベントなどの撮影を行いながら、ライフワークであるスナップ撮影やワークショップの講師を行う。写真撮影と街撮りコラムを執筆した「ナゴヤ愛 地元民も知らないスゴイ魅力」(秀和システム・刊)を出版。



金賞

加藤大樹 約束

白い息で両手をあたためて、コートのポケットからスマートフォンを取り出す。約束の時間まであと5分ほど。ランチの時間にはまだ少し早いため、広場に人はまばらで、おだやかな時間が流れている。遠くに見えるタワーを見上げると雲間から太陽が顔を出し、あたたかな光に目を細めた。噴水から勢いよく飛び出す水が冬の日差しをキラキラと跳ね返し、その向こうにタワーが堂々と見える景色に懐かしい既視感を覚えた。

そろそろ発信ボタンを押そうかと画面に指をかけると、手の中でヴザヴとスマートフォンが震えた。

「もしもし」

「少し早かった？ もう着いてる？」

「ああ、ちょうど僕も今かけようかと思ってたところだった」

「よかった。今はどのあたり？ 噴水が見える？」

「うん、よく見えるよ。あいかわらず勢いよくがんばってる。そっちは？」

「いつも通りだよ。噴水の向こうにタワーが見える。もうすぐライトアップがはじまるからきっときれいね」

しばらくの沈黙の間、二人は目を閉じ、電話の向こうから聞こえる噴水の音に耳をすまし、おたがいが見ている景色を想像した。

彼女が先に口を開いた。

「そっちのタワーはきっともっと大きいでしょうね」

「君の今見てる風景とそんなに変わらないよ。希望の広場から見えるテレビ塔が懐かしい」

「クリスマスまでもうちょっとだね。そのころにはここで一緒にイルミネーションを見られるのを楽しみにしてる」

「ああ、今年はきっと一緒に見よう」

彼はトロカデロ広場からエッフェル塔を眺めながら、遠く離れた恋人に約束をした。



銀賞

ジャッキー
いつまでも幸せに暮らしましたとや

カラコロン

下駄の音まで楽しそうに響かせて、美智子が歩く。撫子色と藤色、水色が混じり合う絞り染めの浴衣を着た彼女は、人で賑わう大須でもパッと目を惹いた。

その姿に見惚れていると、「映画、楽しみね」

と美智子が微笑んだ。

「ああ、うん」

「ねえ、ちょっとなにか食べましょう？」

「ああ、うん」ああもう、なんてかわいいんだろう。僕は夢うつつで、真夏のアイスクリームみたいにとろけた顔をしていたんだろう。

美智子は突然、繋いでいた僕の手をぎゅっと握って引き寄せた。

「もう！ 聞いているの？」

「聞いているよ。ごめんね、美智子に見惚れてて」

「もう、そんなことばかり言って。60年後、私がお婆ちゃんになっても同じこと言えるのかしら」

ぶりぶり怒った顔もかわいい。怒られても顔がにやけてしまう。重症だ。

「未永く、よろしくおねがいします」僕はなんだか変なことを言い、「こちらこそ、未永くよろしくおねがいします」と美智子がべこりと頭を下げた。

カラコロン

下駄の音がリズムよく鳴る。

ふんわりやわらかな浴衣に、真っ白な髪を綺麗に結った美智子は、あの時と変わらず人で賑わう大須の街でもパッと目を惹くほど綺麗だ。

「怪談寄席、おもしろかったわね」美智子が出た。

「ああ、演芸場久しぶりに行ったね」僕が答える。

「ねえ、ちょっとなにか食べましょう？」

「ああ、うん」

「クレープ食べましょうよ。あそこのマンゴーのクレープ食べたいわ」

「ああ、うん」

「あなたはレモンスカッシュ？ それとも、タコス屋さんに行く？」

「ああ、うん」ああもう、なんて幸せなんだろう。僕は夢うつつで真夏のソフトクリームみたいにとろけた顔をしていたんだろう。

美智子は突然、繋いでいた僕の手をぎゅっと握って引き寄せた。

「もう！ 聞いているの？」

「聞いているよ。ごめんね、美智子に見惚れてて」

「もう、そんなことばかり言って……60年前から変わらないんだから」



銀賞

高瀬奈々 恋文

突然のお手紙、お許してください。

どんなに頑張っても、振り向いてくれる気配がない貴女のことを、好きになってしまいました。

言葉を交わしたことすらないじゃない、って思うかもしれません。

それでも、
沢山の人の群れの中に貴女を初めて見つけたとき
ひたすらに前向きな姿に、僕は確かに、心を奪われました。

あの日から僕はいつも
貴女の背中を見つめています。

何十年越しの片思いだと言えば、驚かせてしまうでしょうか。
つい先日、
その何十年の中で、初めてのことが起こりました。
貴女の様子が変わってしまったのです。
僕と貴女のあいだに、高くはないけれど、確実に間を隔てる壁ができてしまったことに気づいたのです。

貴女の姿は見えるのに。今までと同じ場所にいるのに。
貴女が遠くなってしまったような気がして、悲しくなりました。

でも、僕の思いが勝ったのでしょう、
ある日、壁は崩れました。
そして、それ以来、貴女は以前にも増して美しくなりました。

実は私も、貴女に恥じぬように
試行錯誤しては、リニューアルという自分磨きを続けています。

この何十年もの間、貴女との距離が縮まることはありませんでした。
これからも、きっと無いでしょう。

でも、
いつの日か、奇跡が起きて
貴女が一瞬でもこちらを振り返ってくれたら……と祈りながら、
僕はまたこれからも、貴女の背中を見つめて、いえ、見守っていこうと思います。

希望の泉 でいつも空に手を伸ばす貴女様へ
名古屋テレビ塔……じゃなかった、中部電力MIRAI TOWERより



佳作

いもてん 最後に、あなたへ

「みたらし一本、いえ、二本下さい」

香ばしい醤油の匂いに引き寄せられ、私は懐かしい店先に立つ。この店を訪れるのは三年ぶりだ。あの頃、祖母はまだ元気だった。大本命の企業から内定を貰ったものの、彼氏と遠距離恋愛になることが怖くなり悩んでいた私に、焼き立ての団子を手渡ししながら祖母はこう言った。

『なんでもやってみることだよ』

そして悪戯っぽい顔で、
『もし今の彼氏と駄目になっても、ばあちゃんももっといい男見つけてあげるから』

『私達、好み似てるもんね』

それだけが理由ではないけれど、私は東京へ行き、やりたかった仕事に就き、やっぱり彼氏とは別れることになった。けれど、祖母が新しい彼氏を紹介してくれることは、もう無い。

「焼き立てで熱いので、お気をつけて」

団子を受け取り店の脇に立つ。大きな赤提灯に染め抜かれた大須の文字が、不意に揺らめいた。

もっと会っておけばよかった。仕事が忙しいとか、コロナだからとか言い訳していないで、もっと実家に帰っておけば。

「あもう」

鼻を吸った時、遠慮がちな声をした。顔を上げると、私と同じ年位と思われる男性が立っている。

「もしかして、永野富美子さんのお孫さんではないですか」

新車のナンバーかと身構えたが、それは確かに祖母の名前だ。私が頷くと、彼は嬉しそうな顔をした。

「やっぱり! いやその、実はですね」

彼の差し出してきたスマホを覗き込む。そこに写っているのはこの団子屋の店先で仲睦まじく肩を寄せ合う、祖母と、見知らぬ老人。
「これ、俺のじいちゃんなんです。ひと月前に癌で死んじゃったんですけど、最後に富美子さんに言付けたって」

私はぼかんとする。

「私の祖母も、先月亡くなりました、癌で」

「え？」

彼は、写真の中の祖父にそっくりの目を丸くする。

「えーと、じゃあ」

「良かったらお団子、食べますか」

私は、つい二本買ってしまったお団子の一本を差し出す。



佳作

田中へいた ばれんように

「唐揚げ、手羽先。みたらしだんごにタピオカミルクティー」

「^{つどや}呟きながら歩いていていた青年の鼻がびくびくと膨らんだ。あたりの匂いを嗅いで、ぺろりと舌なめずりをする。瞳孔が細長く開く。平日のお昼前の仁王門通りは、まだ人通りがそれほど多くない。

「いっそのこと、洋食屋でハヤシライスもいいかもなあ」

「ひげ」

青年が耳元の声にびっくりする。アロハシャツを着こなした金髪のにいちゃんがポケットに手をつっこんでにやにやしなから傍に立っていた。

「ひげが出てぞ」

にいちゃんは右手をポケットから出すと、指を自分の頬のあたりでひらひらさせる。青年が慌てて頬を触る。長くて丈夫でなひげが何本も飛び出していた。目を白黒させながら両の手のひらで押し戻す。

「ありがとう」

青年が金髪のにいちゃんにお礼を言った。にいちゃんが笑った。

「左手が『招いて』る」

青年が慌ててこめかみの隣につけた左手を下ろす。

「ま、お互いばれんうちに帰ろまい」

にいちゃんはまたポケットに手を突っ込むと、くるりと背中を向けた。歩き始めると、近くにいたもう一人のアロハシャツのにいちゃんが後を追いかけていった。やっぱり、金髪だ。

二人を見送りながら青年がお尻をなでた。尻尾は出ていない。

「よかった。ばれんで」

小さい声で言って歩き出した。

「今日は金鱈さんも来とるね」

買い物袋を下げた母親に手を引かれながら女の子がいった。

「うん。仲ええね」

「広場の招き猫さんは、何食べるのかな」

「ハヤシライスじゃない？よく見かけるし」

「あ。こっち来る。挨拶していい？」

「しーっ」

母親が唇に人差し指をあてた。青年が軽く会釈して通り過ぎていく。小さな、小さな声で母親が女の子にささやいた。

「そっとしとかないかんよ。みんな気づいてるって、ばれんようにね」



入選

高本霧 おっきいなあ

身長が止まった。まだ、たったの157cmしかないのに、止まった。

「はあ」

どうしてだろう。嫌いな牛乳も我慢して毎日飲んでいたのに。

「ため息ばかりつかないの、身体測定だけのことで」

「私には重要な」

「そんなため息聞いてたらこっちまで暗くなるわ。そうだ、久しぶりに一緒に買い物でも行かない？」

「気分じゃない」

「気分じゃなくても行くの」

楽しみだわ～、わざとらしく鼻歌を歌いながらルンルンと立ち上がったママを睨みつける。

勝手なんだから。そもそも私の身長が伸びないのはたぶんママの遺伝だ。母親が背の高い人だと子供はだいたいみんな背が高くなると思う。

はあ。

遺伝だったら、どうしようもないじゃないか。

「おっきいなあ」

名駅のゲートタワーで買い物をした後、ナナちゃん人形の前まで来てママが言った。

「あんたがこれ見てモデルになるって言った時は子供の戯言かと思ってたけど、まさか本気だったとわね」

私からはじめてナナちゃん人形を見たのはたしか7歳の時で、その大きさと長い手足に魅了された私は

「ねえママ、ナナちゃん見に行きたい」

と何度もねだった。

ナナちゃん人形は私が行くたびに違う衣装を身にまとい、何度見に行っても飽きることがなかった。

「ナナちゃんは名古屋で一番有名なモデルさんなんだよ」

その時からだ。私の夢がモデルになったのは。

160cmになったらオーディションに応募すると決めていた。なのにもう1年間、私の身長はちっとも変わらない。

「ねえ」

ママが私の耳元にそっとささやく。

「なに」

「私はね、こうやっていろんな衣装を着てたくさんの人に見られてるナナちゃんも立派だと思うけど、ナナちゃんやナナちゃんの着ている衣装を作った人のこともすごいと思うのよねえ」

考えたこともなかった。

ママがはっとしたような私の目を見て、にやりと笑う。

「あなたにはまだ見えていない世界がたくさんあるのよ」



入選

北崎景 顔を上げれば見えるもの

夏休みも残り8日、ユキは嗚咽を押し込めながらナナちゃん人形を見上げていた。

次に着替えた姿を自分はもう見られない。滞在中に親しんだものが剥がれていく感覚はたまらなく寂しかった。

そして手を引かれるままに踵を返す。

「ユキちゃん、明日の新幹線で泣いたらいかんよ」

隣を歩く祖母の顔を見上げる。真夏の日差しを背負う顔は逆光で薄暗くなりながら、いつもと同じ深い笑みを浮かべていた。

「ユキ、泣かへんし。もうすぐ9歳やもん」

そう言いながら、柔い皺の寄った二の腕に頬をすり寄せる。半袖から伸びる腕は触るとひんやりしていて、熱くなった頬に心地良かった。

「じいちゃんが二人でお茶して来やあって言うでさ、地下鉄乗る前に喫茶店行こうか」

「行く。アイスのやつ食べたい!」

「あ、ほら。大きい“ぐるぐる”あるよ。見える?」

踏み出した右足の歩幅が急に広がった。求めかけた甘い味も忘れ、口内が干からびる。

「……なんで、あるん?」

祖母を隔てた向こう側には“ぐるぐる”と呼んでいた巨大なモニュメント、飛翔がそびえ立っていた。その瞬間、思い出を夢で反芻していることに気が付いてしまう。

飛翔が名駅からなくなったことを、中区のお寺で眠る祖母は知らない。

「大阪帰るときに寂しいのはばあちゃんも一緒だね」

たたらを踏んで揺れた目線が祖母の頭を超える。

胸を掻き塗るようになるほどの優しい笑みはもうユキを向いていない。

自分よりも低くなった額の汗が光ると、視界の全てがいっしょくたに混ざっていった。

「お墓参り行こうかな」

起き抜けの潤いた喉でひとりごちる。

最後に見た祖母の姿を思い出す。思い返してみれば、外を歩く祖母の顔はいつも逆光だった。たぶん、ユキの日よけになってくれていたのだろう。

カーテンを開けると朝焼けが目にしみる。家屋と空に挟まった太陽は最寄り駅と同じウィンザーイエローに輝いていた。



入選

終わる嫌い、時々大好き。

名古屋は嫌い。

ごちゃごちゃしているくせに、ちんまりした駅前。

遠くに出る気も失せるぐらい、何でも手に入るところ。

こんなだから。

ナナちゃん人形の前で私は待っているのに。

こんなだから。

あなたはまた東京へ、大阪へとふらりと行ってしまふのだ。

あなたの好きなアニメキャラクターのコスプレや、私好みのおしゃれな服を着たナナちゃんを、通るたびに嬉しそうに写真に収めていたあなた。

それなのに。

あなたはどこに行けば手に入るにかわからない、何かを探しに行ってしまうのだ。

気が付けば、あなたが到着するはずの時間はとうに過ぎていた。

もしかして、あなたはもうここには帰ってこないのではないか。何かを見つけてしまったのではないか。急に怖くなる。

その時だった。

「見つけた」

あなたは帰ってきた。ナナちゃん人形の前に。

「ただいま。やっぱり名古屋は落ち着くなあ」

のんきに笑うあなたを

「遅い」

とにらみつけると

「ごめんね、待たせて。」

やっぱり笑うから、私はパイとそばを向く。

「あ、ナナちゃんもお祝いのドレス着ているじゃん」

そんな私をよそに、君は嬉しそう。

「僕たちを祝ってくれているんだあ」

「は?」

私は驚いて振り向く。

「日本中を見てきたけどさ、僕の家はやっぱりここだよ。名古屋の、君の隣」

あなたと、ナナちゃんまで、あんまり優しく笑って見えるから、名古屋駅前の鮮やかな景色が何だか滲んで見えてしまう。

これだから、名古屋は嫌いだ。



入選

この場所から見えるもの メグリくる

この場所から見える本質は、今も昔も変わらない。
だからきっと、これから先、遠い未来になったとしても、形は変わっても、この場所の本質は変わらないのだと思う。

最初は、いい目印だったのだろう。家電で待ち合わせ場所に指定して、皆で合流して遊びに出かける。でも、足元だと人が多くて少し離れていると中々見つけられなくて、行ったり来たり。でも、今移動して待ち合わせ相手がここに来たら会えないんじゃないか？なんて不安になりながら、それでも待ち人を見つけると、皆ここで笑顔になって、出かけていった。

ポケベルが出てくると、駅の伝言掲示板で待ち合わせするより便利になった。ちょっとでも状況が変わると、皆慌てて公衆電話を探したりしていた。

携帯電話を皆持つようになると、もっと簡単に合流できるようになった。そしてそれは、スマホが普及しても、変わらない。

この場所から見える本質は、今も昔も変わらない。

その様子を私は、話題になった映画や漫画の衣装だったり、会社とのタイアップやPRで色々な服を着ながら見てきた。もちろん、マスクをする時だってあった。そして誕生日は、お祝いのケーキを持ったりしている。

私の名前は、ナナちゃん。他の人たちからは、ナナちゃん人形って呼ばれている。

この場所から見える本質は、今も昔も変わらない。



入選

瞳 ナナちゃん

君は、ここに元気にまだ立っているんだね。私は歳をとって体も心も老いていくのに私と違って君は、どんどんおしゃれになって綺麗になって、ますます世間から注目されて活躍している。いつまで活躍をするの。君の存在を知った頃の私は、若かった。君も若かったけどそのうち君はここからいなくなると思っていた。少なくとも私より早く。なのに君は、君の意志とは別の予想外の展開で、君の名前の由来の店が無くなっても君は不思議に存在している。今思うと君は、昔から達観していたね。君の足元に人がまどわりついていても。どんなに時代が変化しても。世の中は、なるようにしかならない。そんな風に思っているように思えた。でも、私は、裸で立っていた若かったあの頃の君に会いたい。あの頃に戻りたい。そして、君に言うんだ。「君は将来名古屋のガイドブックに載るようになるよ。綺麗な洋服を着て時代や季節、流行を発信するようになるよ」そしたら、君はなんて言うんだろう。「そうなのですか」淡々と答えるのだろうか？ 駆け抜けていく、いくつもの季節。君と私。どちらがこの先、沢山経験できるのだろうか。



入選

おくも ナナちゃん人形で、六時半。

「ナナちゃん人形で待ってる。六時半に。」

君との初めての約束。いつものあの慣れ親しんだナナちゃん人形の下に君が現れること。何だか夢みたいで、私には全く想像がつかなかった。

人生で初めてのデート。これまで、何度あの下で待ち合わせすることを夢見てきたことか。その夢がやっと叶う。明日の六時半は、きっと世界一幸せだ。

いつも、友達との待ち合わせは大抵、あのナナちゃん人形だった。名古屋っ子ならあるあるで、そこが一番見つけやすくて、ちょうどいいよなってなって、長年それが定着していた。

いつも行くたびに違うコスチュームをきて、可愛く着飾ってあるナナちゃん。名古屋の人気者の君の下で、私は明日、緊張して所在なさげに君を待つ。

待ち合わせの十五分前。ナナちゃんの真下で立つ。早く着いたはいいいけれど、こう言う時ってどんなふう待つべきなのか。本当はドキドキする。何を話そうとか、会った瞬間どんな会話をしようとか、そんな事を考える。

だけど、ナナちゃん人形があまりにも可愛い服を着ていたから私は思わず写真を撮った。名古屋在住なのに。どうせいつもみれるのに。まるで観光客かのように、この後のデートの緊張を紛らわすかのように。

「お待ちせ」

シャッターと君の声は同時だった。

「写真撮ってた？」

君は優しそうに、目を細めて言う。きっと、君は全てお見通しだろう。この緊張も、それを隠そうと写真を撮っていたことも。

「今日もナナちゃんオシャレだね」

「そ、そうですね。」

オシャレなんて言ってしまう、君の言葉遣いが好きだった。

私はそっとスマホをしまっ、君とのデートに駆け出した。



入選

小渡 ノツポ 琉衣

「背が高いね」

てっきり私のことかと思ったけれど、言葉はうんと下の方で飛び交っていた。あら、私だって負けてないわよって目をやると、ピンク、金色、青。カラフルに髪を染めた十七、八歳くらいの女の子たち。皆おなじ制服を着ているので高校生なのだと思うけれど、おしやれをする、色とりどりの「私」になる、それだけで何だかうきうきしてしまう気持ちはよく分かるから、最近では自由におしやれを楽しめる学校があるのねとうれしくなった。けれどよく見ると、そう言われたピンクの髪の子はあまり良いふうを受け取っていないようで、

「背が低い方がかわいいじゃない」

と、言った。

そんなことないわ。とても素敵なのに。心は声にならず、百貨店の方へ入っていく彼女たちを私は見送るしかできない。

背の高いのを苦く思ったことはなかった。少し窮屈ではあるけれど、代わりに何でも見えるから。ゆっくり、ゆっくり街が移り変わっていくのも、流行も、季節の変わるにおいだって敏感に感じることができる。ああ、あそこの彼の髪が薄くなっていることもね(おそろいね)。それに、たかさんの人が私を見てくれる。時には一緒に写真を撮ってくれることもあるのよ。もしも私が普通だったら経験できない、とても素敵なことでしょう。唯一いやなことがあるとしたら、ふざけて脚の間を通られることかしら。私も若くはないけれど、いつまでもレディとして扱ってほしいものだわ。

更ける。あちこちライトが消されて、今日もとっぴり静けさにつつまれる。ここ数年、夜も「聞き屋」という看板を掛けた人がそばにいて、話し声がするからあまりさみしくもなくなったけれど、たったひとり、ここに佇む時間もきらいじゃない。あの子はまた来てくれるかしら。誇らしく立つ私を見て、今度は何か思ってくれるかしら。かすかな街の息づかいを枕に眠る。おやすみなさい。

(スカートの中がどうなってるか、ですって? 決まってるじゃない。)



入選

浅野トシユキ 文乃さんの好きなこと

天気の良い日曜日の朝、文乃さんは地下鉄に乗って栄にお出かけをする。そしてテレビ塔がよく見えるベンチに座り本を開く。これが彼女にとって至福の時間。文学少女に見える文乃さんなのが愛読書は『竜馬がゆく』。実は幕末が大好きな「歴女」でもある。薩長土肥の志士たちが幕府を倒すために命をかけて戦うところに胸が熱くなるというのだ。

文乃さんは他にも好きなことがある。それはテレビ塔のそばにある小さな本屋に行くこと。なぜならその本屋には文乃さんが好きな歴史の本がたくさん並んでいるから。それを眺めているだけで文乃さんは幸せを感じるのである。そしてもう一つ、そのお店には気になる男性店員もいる。その人はいまどきのイケメンというよりも、まさにサムライといった風貌。以前から文乃さんはその男性と話しをしてみたいとずっと想いを募らせていた。

ある日、文乃さんは本を買うとき、その男性に清水の舞台から飛び降りるような気持ちで想いを伝えた。すると、「いいですよ。名古屋城にでも行きますか。近いですし」あっさりOKだった。

翌週、二人だけで名古屋城を訪れた。まずは雰囲気大事だろうと二人とも着物姿。まさにお似合いのカップルだ。特に男性は着物がよく似合っていた。

その時、文乃さんは彼の名前をちゃんときいていないことに気がついた。お店では「若さま」とか「ヨシさん」とか呼ばれているのは知っていた。「あの、私は本田文乃といいます。お名前を聞いてもいいですか」

文乃さんは頬を真っ赤にしながらいきながら聞いてみた。「あ、そうでしたね」

彼は懐をゴソゴソときがして名刺をサッと出した。その名刺には「徳川義信」と大きく書かれ、金色の家紋が入っていた。



入選

サノアイコ 藤川潮の最近

誰か、知ってくれ
俺にだっていろいろあるんだ

煙草はやめたいし
嫁には優しくしたい
娘から好かれたいし
家のローンも払いきりたい

こないだの健康診断で、メタボリックがC判定だったのを隠しているのは測って貰った時に、ほんのちょっとだけ腹を引っ込めたのに、C判定だったから看護師さんは絶対気づいていたはずだから「はい、息全部吐いてくださいねー」って言ったんだ。わかってる、わかってるよ。ただ俺にだっていろいろあるんだ

先月の人事で異動してきた俺より若い奴でも仕事上、俺より上の立場にあたる奴。スラっとした背丈、清潔感もあり、新婚。野球をやっていて肩が強かったから外野手だったらしい。「えーそうなんですかあすごい」と騒ぐデスクの若い子達に紛れて野球なら俺もやってたって話をしてきた。どうせ相手にされないだろうと思っていたら「でも本当はピッチャーがよかったからすぐ辞めちゃったんですけどね」と、俺に耳打ちした。眉を下げて笑う顔すら爽やかだ。嫌な奴なら良かったのに、良い奴そうで参る。俺にだっていろいろあるんだ

午後の会議が長引いた。煙草が吸える場所が年々減った。甘ったるい缶コーヒーを立てて飲む。オシャレなカフェに入る勇気なんざない。夕日も沈んで、すぐ暗くなるだろう。どこからか歌が聴こえる。ブルーハーツだと気づくまでに時間がかかった。文化祭で親友が歌ってた。あいつは今元氣だろうか。最近飲みに行っていない。

ふいに泣きたくなる。だけどおっさんが泣くと気持ち悪かられるんだ、知ってる。だから泣かない。ここは希望の泉、知ってる。だけど俺には何も無い。湧き上がる希望が欲しい。

その瞬間、テレビ塔が光った。誰かがきれいな、と声をあげた。

煙草はやめたい
嫁には優しくしたい
娘から好かれたいし
家のローンも払いきりたい

続かないダイエットを
また今日から始めてみようかと思う
会社の草野球チームに
名前を書いてみようかと思う
思うだけでも褒めてくれたっていいじゃないか

俺にだって希望が欲しいんだ



入選

水籬月架 今も昔も

行き交う人波。
老若男女、みんな楽しそう。

大須と云えばまずは観音さま。
本堂にお参りしたら、自分の干支の守り本尊さまに出逢いにいくのもいいかもね。
私を守ってくださる仏さまはどなたかな。

大須と云えば食べ歩き。
四つの通りに囲まれて九つの商店街に活気のあるお店が並んでる。
やっぱりからあげ、台湾カステラ、豆花、ふわふわのかき氷。
クロッフルに、できたてモンブラン。
まだまだタピオカも人気だよ。
私もこっそり抜け出して、イマドキのお味食べてみたいな。

昔からの専門店も間違いなくおいしいね。
天津甘栗、栗まんじゅう。
冬はフルーツ大福、夏は水まんじゅう。
名物串かつ、あつあつおでん。
カエルまんじゅう、ケロトツツオ。
みたらし団子に天然たい焼き。
皮はパリパリ、しっぽの先まであんこがぎっしり。
私のしっぽはあんこは入っていないけど。

おしゃれでかわいい雑貨屋さん。
いつ着るどこで着るエスニックなお洋服。
古着ショップで掘り出し物探してみるのもいいな。
家電、カメラ、パソコン、パーツ。
日本三大電気街なんだって。
日の本広しと云えど三本の指に入るとは、私も鼻が高いです。

ちょっと疲れたら素敵なカフェでお茶もいいね。
昔ながらの喫茶店でホッと一息、安らぐね。
私もひっそり人間に化けて、一緒におしゃべりしてみたい。

賑わう大須。
観音さまの門前町。
昔は毎日、大道芸、物まね、曲芸などで大盛り上がり。
縁日には行き交う人波。
老若男女、みんな嬉しそう。
今も昔も変わらないね。

そうそう、私にも会いに来てね。
万松寺の白いきつね。
招福、繁盛、お願いごとの成就是まかせてね。
みんな毎日がんばってる。
今日は大須を楽しんでね。



入選

森 いやし心の 三和子 大須

やっと1週間が終わった・・・。
月曜から5日せっせと働いて、気づけば金曜日の夕方、家路を急ぐ私。
駅前スーパーでキンキンに冷えた缶ビールを1本買って帰る。それが唯一のご褒美だ。

私は二人の子を持つシングルマザー。
水曜日は取引先とのトラブルで苦情処理に追われた。家にたどり着いたのは午後10時。
精も根も尽き果てて、子どもとろくに話すこともなく、ベッドになだれ込んだ。
翌朝、いつものように子どもを起こして朝食をとらせ、登校するのを見届けてメイク。
つい鏡の中の自分に向かって呟いてしまう、「私、何のために生きてんだろ?」
「何言ってるの、自分が選んだ道でしょ」鏡の私が冷たく言い返す。
「そうだね、そうなんだけど……」

親子三人がこうして生きることのできる幸せ。それは重々分かってる。
でも時折弱音が込み上げてくる。私のこの先に何が待っていると言うんだらう、と。

私達家族のささやかな楽しみ。それは月に一度大須に行くことだ。
離婚して間もない頃、ハローワークの帰りにふらりと訪れたのが始まり。
幼かった二人の娘は観音様の鳩に夢中になり、鳩さん軍団にいっぱい遊んでいただいた。
先に進むと小さな赤い鳥居がいくつも連なるお宮さん。三人並んでお参り。
かぐわしい香りに誘われてさらに歩けば、世界の料理があちらこちらで売られていた。
眉毛のイケメン青年が陽気に声をかけてくる「おいしいよ、どうぞいらっしやいせ!」。
「ここは一年中お祭りなの?」
「そうだよ、ここはね、いつ来てもみんなが楽しめる場所なんだよ」
口のまわりをきな粉だらけにしながらみたらし団子をすこぶる喜んで食べた娘が言った。
「また連れてきてね」・・・その約束を守って7年が経とうとしている。

「明日は大須に行くよね。お買い物もしていい?」「もちろん!!」
私も串カツとビールで命の洗濯をしよう、私達の大切な街、大須で。



入選

桑嶋ミキト 大須に、雨が降り出した

待ち合わせはいつもの、仁王門通の東端にある、赤い提灯の下。
ここで、いつものようにオレはエリコがやって来るのを楽しみにしていた。最近ではほぼ毎週日曜日に、エリコと会えるから嬉しい。

ふと、アーケードの端から空を見上げる。

珍しく、今日は雨が降っていない。

どういう訳か、エリコとデートする日は、雨が多いのだが、今日は珍しく晴れている。

雨降りのデートが多いせいか、オレは雨が降るとエリコのこと頭がいっぱいになるし、エリコのことを想うといつも空を見上げてしまうようになった。

雨もまんざら、悪いものではない。ただ、オレは体が濡れたくないから、エリコとのデートはいつも、大須の商店街を一緒に歩くことにしている。ここはオレの地元でもある。

辺りには、みたらし団子を焼くいい匂いが漂っていた。

この角にあるみたらし団子の店はいつも人気で、今日も行列ができています。

来た!

空腹を我慢して待っていたら、エリコの歩く姿が見えた。今日は青いスカートをはいていて、とびきり似合っている。

嬉しくて、オレはつい走って駆け寄る。すると、エリコは笑顔でオレの頬や頭を撫でた。

おいおい、オレはいい年の男だぜ。子ども扱いはやめてほしいものだ。

いつものように商店街を一緒に歩いていると、この日、エリコは思い詰めたような表情になってオレに語りかけてきた。

「ねえ、話があるの。いいかな?」

もちろん、嫌な訳ないさ。

「色々あなたのことを考えたんだけど、……もし、よかったら、私のアパートで一緒に暮らさない?」

え? まさかの女子からのプロポーズか?

嬉しい。嬉しいよ。キミと雨じゃない日も一緒にいられるなんて夢のようだ。

オレは頷くと、エリコは、「おいで」とオレを抱きしめて持ち上げた。

ありがとう。

オレは、ネコに生まれてきてよかったよ。

ふと、エリコの腕の中から、空を見上げる。

すると、さっきまで晴れていたのに、涙を流すように大須に雨が降り出した。



入選

門歩 鸞 蕎麦の匂い

私の勤務する呼吸器内科のクリニックに50代のある男性が訪れた。名古屋大学の附属病院で胸膜中皮腫と診断され、抗がん剤治療を続けていたが、大学病院での治療を諦めて、このクリニックの門を叩いたという。

彼の病状は深刻だった。検査体制も充実し、高度な治療を受けられる大学病院に戻るよう、何度か促したことがある。しかし、彼はその都度、転院を断った。

およそ半年が経っても、症状に改善は見られない。その頃には、さすがの私も彼に転院を無理に勧めることはしなかった。この先、病状の回復が見込めないものであったからだ。しばらくしてから、彼は在宅での治療を希望するようになった。

彼は、大須商店街に近いマンションに一人で暮らしていた。私が月に2回ほど、看護師が週2回訪問するというかたちで、在宅診療が始まった。病院での時と違い、自宅での彼の表情は生き生きしていた。建築会社で現場監督をしていた当時の昔の思い出話もよく聞かされた。この部屋の内装もすべて自分で手がけたという。

緩和ケア病棟やホスピスケアの話も提案したが、自宅の中で、極力一人で過ごしたいという。ここで一人で旅立つのだと、彼は同じ言葉を繰り返した。

11月に入って、彼の病状はかなり悪くなっていった。年末には妹さんが来てくれるのだと、彼は教えてくれた。彼女は近くに住んでいるらしかった。

大晦日の31日。彼はまだ話すことができ、水分をとったり、自分でトイレにも立った。彼の強い希望で、商店街にあるなじみの店から好物の蕎麦を出前で頼んだ。彼はその匂いだけを嗅ぐと、『後は食べてくれ』とだけ言って、水だけを口にしたという。

年が明けた2日の夜、妹さんに見守られて、彼は静かに旅立った。年明けすぐに、この話を妹さんから聞かされた。弔問を希望したが、すでに身内だけで簡単な葬儀を済ませたという。

私は彼のレントゲン写真を前にして、カルテに記す最後の言葉をなかなか書けずにいた。



入選

森野 父と大須 浩 大須

長く続く商店街とアーケード、どこか懐かしい昭和の風情と多国籍な店の数々、そしてメイド喫茶にパソコンショップなど雑多なものを飲み込んで見事に調和させている街、そんな大須が僕は好きだ。

「明日は大須に行くから一緒に飲まないか」というメールが父からあったのは昨日のことだ。僕はいま待ち合わせ場所の大須観音に向かって歩いている。

父は小さな町工場の課長をしていた。と言っても従業員は10名ほどしかいなかったので現場の班長と言った方がしっくりくる。毎日残業してくる父の作業着は、真っ黒で母が洗濯しながら『汚れが落ちんわ、でも感謝せなあかんね、働いたあかしだから』とよく言っていた。そんな母は僕が高校生のとき癌で死んだ。体調不良で検査をしてステージ4と診断されてから半年後だった。

しばらく落ち込んでいた父を救ったのは友達に誘われて行った大須演芸場だった。笑いが父の心を癒したのか、だんだん元気になっていった。「母さんの分まで楽しく生きる」この頃の父の口癖だ。

僕が結婚してから、父は共稼ぎだった僕たちの子育てをよく手伝ってくれた。妻もそのときのことを感謝しているし、高校生の娘は『じいじ』が大好きだ。2人で大須に行くこともあるらしい。

約束より早く着いたが境内に父がいた。暑さのためか緑色のキャップをかぶり、手に持ったトートバッグから団扇の先がのぞいていた。何かいづつと違うそう思ったとき、

「じつは〇〇というアイドルのライブに行ってきたんだわ」と照れくさそうに父が言った。〇〇は大須のご当地アイドルグループだ。娘の部屋にポスターがある。緑色は娘の推しだ。2人でたまに大須に行っていた……。思考はめぐるが言葉はでない、大須が68歳のオタクを生み出した。そして父は確かに楽しく生きている。



入選

東歩 夏の終わり

「ここが、大須商店街？」

夏の蒸し暑さを感じながら歩く万松寺通。ぼくの隣で榊さんが大きな目を輝かせている。

感触は悪くない。チャンスだ。これは彼女にするチャンス。「わぁ！唐揚げ屋さんがある！服屋さんも多いね。中条くん、ここにはよく来るの？」

「まあ、ここはぼくの庭みたいなものだから」

余裕を見せつつちらりと横の彼女を盗み見る。小柄で愛らしい榊さんとは大学のサークルで知り合った。聞けば大学入学と同時に初めて名古屋に来たという。

中高一貫男子校にいたぼくは、女の子の扱いには慣れていない。しかし、リサーチには自信がある。密かに榊さんの好みをリサーチし考え出したこのデートコース。彼女は気取らない性格で食べるのが大好き。それならここ、大須商店街だ。

大きな鶏の丸焼きが並ぶブラジル料理店やフォーとバンミーが気軽に食べられるベトナム料理店など、異国情緒あふれる店が多い東仁王門通。

新天地通はぼーっと歩いていると思わぬところにお寺が出現する。

車道の大須本通と門前町通、赤門通にはあまり興味が引かれなくてもいいが、大須観音通と仁王門通は食べ物店が多いえに通りの先には大須観音があって、ちょっとした縁日の気分になれるからもっとテンションが上がるだろう。

いたるところで見かけるのは唐揚げ店や果物が入ったスイーツ店、ふわりとした綿雪のような台湾かき氷店だ。

「わたし、かき氷買うからちょっと待って」

「ぼくがおごるよ」

「ありがとう！」と喜ぶ榊さんに笑みを返ししながら、中条リサーチに死角なし！と心の中でガッツポーズをしたそのとき。

「いいね、ここ。今度、彼氏をつれてこよう」そのことばにぼくは一瞬で凍り付き、尋ねた。

「あの……榊さん、彼氏いるの？」

「うん、高校からね。遠距離だけど、時々来てくれるの」

初歩的なリサーチ不足……。

目を輝かせながらかき氷を口に含む榊さんの隣で、彼女をつくるというぼくの野望は淡く儚く溶けた。



ワークショップ

「ショート・ショートのかげとしくみ」と題し、講師に名古屋の出版社風媒社編集長の劉永昇氏を迎えました。↓



↑海外小説の紹介や、小説の書き方、読み方の新しい目線をプロの視点でお話いただきました。その後はワークショップ恒例のお役立ち企画、個別作品カウンセリングを実施。

最終選考会



←愛知淑徳大学有志の皆さんの厳正なる一次選考の結果、入選した20作品。ひと作品ずつ最終選考委員の方々に審議していただきました。今年もオンラインでしたが、選考委員の皆さんが入賞の決め手などを話し合い、合議で5作品を決定いたしました。

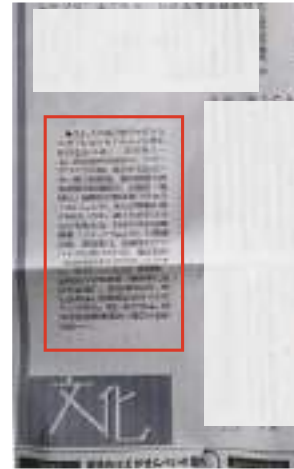
コトノハなごやサロン

2年ぶりのリアル開催に加え、ライブ配信も行いました。入賞5作品の発表、授賞式後の記念撮影。↓



↑授賞式後は神田沙織さんの司会進行で入選20作品の講評トーク。入選者の皆さんには、プロと直に対話できる貴重な時間を過ごしていただきました。(オンライン視聴数：209回)

メディア掲載・広報普及活動



中日新聞2022.7.23



中日新聞2022.8.12



Yahoo ニュース2022.7.21



サカイ経済新聞 2022.7.21



中日新聞2023.1.19



「ステキブンゲイ」サイトトップページバナー 2022.7.15-9.15

(ウェブ媒体) docomoニュース2022.7 公募ガイド2022.7 公募ストック2022.8 登竜門2022.8
「ナニヨム」サイトトップページバナー
(ラジオ) FM AICHI 2022.8
(チラシ配架) 市内施設・図書館、市内協力書店、県内高等学校・大学

制作物



公式ウェブサイト(応募フォーム含)



1/9サロン開催チラシ(A4カラー)



作品募集チラシ(A3 2ツ折 カラー・外面)



作品募集チラシ(A3 2ツ折 カラー・中面)

- 一次選考用ドライブ
- 公式SNS(note、Twitter、Facebook、Instagram)

開催概要

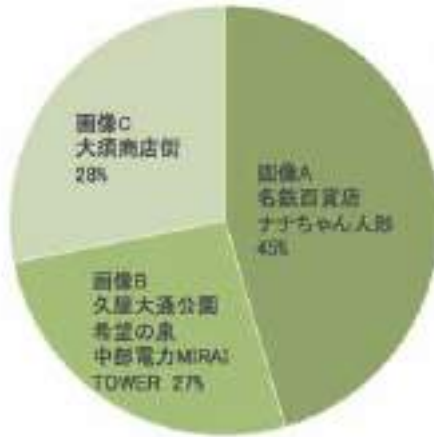
- 事業名称 文芸による名古屋の魅力推進事業 「コトノハなごやー
- 募集期間 2022年7月15日(金)～9月15日(木)
- 事業趣旨 なごやの魅力を深掘りする機会をつくり、文芸分野、なごやへの愛着をメディアツールを活用して振興・推進していく。
- 事業概要 作品募集プログラム(公式サイト利用応募を推奨の作品公募実施)と授賞式、ワークショップ(専門家による執筆講座)、選考委員講評トーク(「コトノハなごやサロン」)、広報普及活動

スケジュール

- | | |
|-----------|---|
| 7月 | 公式ウェブサイト公開、募集告知チラシ配布(市内施設等) |
| 7月15日 | 作品募集開始 |
| 7月30日 | ワークショップの開催 |
| 9月15日 | 作品募集終了 |
| 9月下旬 | 一次選考開始(愛知淑徳大学有志による選考) |
| 10月下旬 | 一次選考終了、入選20作品の選出 |
| 10月25日 | 公式ウェブサイトにて入選20作品の発表 |
| 11月下旬 | 選考委員による最終選考会 |
| 2023年1月9日 | コトノハなごやサロン開催(入賞作品発表および授賞式、選考委員による入選作品講評トークの公開) |
| | 公式ウェブサイトにて入賞作品の発表 |
| 3月 | コトノハなごや開催報告発行(入賞5作品および入選15作品、広報活動、募集結果データなどを掲載) |

募集結果データ

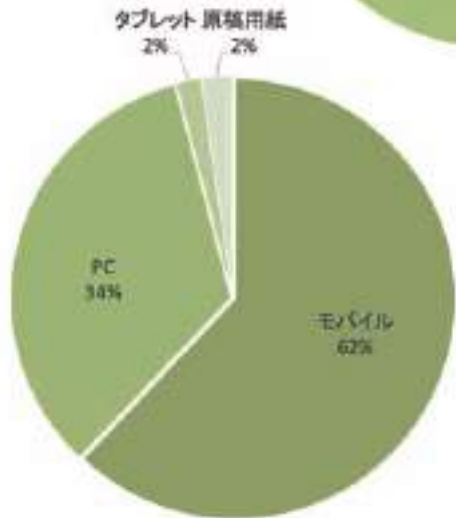
●応募総数 285件(うち郵送15件)/課題写真3枚
 ●ユーザー数 2,993ユーザー



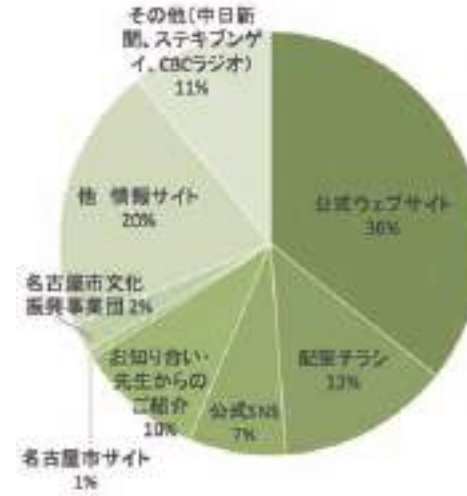
- 選択画像**
- 画像A ...45%
名鉄百貨店ナナちゃん人形
 - 画像B ...27%
久屋大通公園
希望の泉
中部電力 MIRAI TOWER
 - 画像C ...28%
大須商店街



- 応募年齢**
- 10歳代 ...9%
 - 20歳代 ...17%
 - 30歳代 ...18%
 - 40歳代 ...15%
 - 50歳代 ...19%
 - 60歳代 ...12%
 - 70歳代～ ...5%



- 応募デバイス**
- モバイル ...62%
 - PC ...34%
 - タブレット ...2%
 - 原稿用紙 ...2%

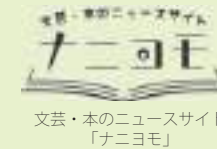
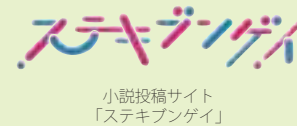


- 募集情報源**
- 公式ウェブサイト...36%
 - 配布チラシ...13%
 - 公式SNS...7%
 - お知り合い・先生からのご紹介...10%
 - 名古屋市長...1%
 - 名古屋市長 振興事業団...2%
 - 他 情報サイト...20%
 - その他(中日新聞、ステキブンゲイ、CBCラジオ)...11%

(過去の実績)

2021年度 応募総数279件(郵送17件)/課題写真 3枚/ユーザー数2,982
 2019年度 応募総数336件(郵送7件)/課題写真 5枚/ユーザー数3,304
 2018年度 応募総数353件(郵送11件)/課題写真10枚/ユーザー数3,336
 2017年度 応募総数165件(郵送3件)/課題写真 5枚/ユーザー数2,416

—広報で協力—



—広報で協力書店様(50音順)—

- ON READING
 紀伊國屋書店 名古屋空港店
 紀伊國屋書店 プライムツリー赤池店
 紀伊國屋書店 mozofワンダーシティ店
 草叢ブックス 新守山店
 くまざわ書店 名古屋セントラルパーク店
 三省堂書店 名古屋本店
 七五書店 (2023.1閉店)
 ジュンク堂書店 名古屋店
 ジュンク堂書店 名古屋栄店
 精文館書店 中島新町店
 ちくさ正文館書店 本店
 TSUTAYA BOOKSTORE 名鉄名古屋店
 TOUTEN BOOKSTORE
 MARUZEN アスナル金山店
 MARUZEN 名古屋本店
 MARUZEN ヒルズウォーク徳重店

—選考で協力—

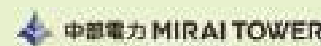


愛知淑徳大学

—課題写真で協力—



株式会社 名鉄百貨店



中部電力MIRAI TOWER
 旧・名古屋テレビ塔

デザイン・広報
 名古屋市観光文化交流局文化芸術推進課
 2023.3